



養成講座と川越大会に参加して

がん哲学外来ぬくみカフェ 柴田 須磨子

「私は傷を持っている、その傷からあなたの優しさが沁みってくる」これは星野富弘師の詩画集の一節です。

30年前にわたしは7歳の末娘を交通事故で亡くしました。その日から普通でなくなった自分と家族。呼吸をしているだけで苦しくなる自分。この不幸をこの止まった時を、これからの人生にどう抜け出していけるのか、もがく日々でした。

人間はいつか必ず死ぬ。それ以来生と死に関わる道をひたすらに歩き続け、四年前に「信徒の友」への娘の喪失寄稿が縁で樋野先生との邂逅の恵みをいただき、今日に至りました。今回の濃密な講演の数々、そのお話の中に、幾つもの共感の言葉に心の扉が開きました。医学が日進月歩を辿る中、生かす医療に焦点があたり、目には見えない心のケアがかすむ中、がん哲学外来の研修は社会への貴重な啓発活動と実感します。

「犬のおまわりさん、困っている人と共に一緒に困ってくれる人」そのようなコーディネーターになるためにはどうしたらよいか。自分の負の体験や人の支えを糧に、決して自分の人生を人任せにしない、人のせいにならない、思いつき決めつけを取り除き、その人の側に寄り添うには、時には自分自身にも優しく緩みのある豊かさを蓄えることが、力まずに周りを照らす光になれるのでは。この場所なら話しても大丈夫、あの人が待っていてくれるから、そんなカフェを目指し歩みを続ける勇気に繋がったことは今回の大きな収穫でした。

最後に矢形先生はじめがんサバイバーの皆さまの日々のお力を祈りながら、次回での再会を誓い合いたいと思います。



座談会 (司会は安藤潔先生)



熱心な討論会 (2G)



杉浦敏行先生



宮田久美子先生



大西秀樹先生



儀賀理暁先生と正司侑子先生

座談会「比較からの脱却～されどカフェ」

新座志木がん哲学外来カフェ 岸尾 光

矢形先生が掲げた「比較からの脱却～たかがカフェ・されどカフェ」のテーマのもと、埼玉県内の患者会とメディカル・カフェの代表者、市民学会の片桐さんが登壇し「開催の悩みも少なくないカフェの存在意義」を探りました。

見えて来たのは、「病気であっても病人ではない」日常を送るために必要な居場所として、他の人との比較や自分の過去との比較から脱却するために、患者さんを含め誰でも参加者同士がフラットな関係で語り寄り添い合う、人生について考える場としてのカフェの姿。たとえ「がん哲学外来・カフェ」でなくとも、樋野先生の「言葉の処方箋」によって参加者に寄り添う、「がん哲学」の普遍性を示すストーリーも紹介されました。

フロアからも発言があり、座長の安藤潔先生の「それぞれのありように相応しく様々な形態で開催できるのもカフェの特徴ですね」とのコメントに会場一同が共感。最後に、カフェ参加者をご逝去された場合について各登壇者がコメントし、仲間が言い残してくれた教訓が引き継がれている事例などが報告されると、安藤先生が次のように締め括られました。

「皆さんが旅立った仲間のことを語っている時、ご本人がまさにここにいらっしやると感じました」

編集後記

養成講座と大会の会場で私を避けて通る人が何人もいた。「原稿を頼まれるとタイヘンだから」だそう。皆さん。どうか私をヨケナイで、サケナイで下さい。

久々に晴れた小諸から (星野 昭江)



養成講座ガイダンス (安藤先生)



自分を認めることって (大賀先生)



8G (柴田須磨子さん)



がんの遺伝 (櫻井晃洋先生)